



OPA BIC

予測がつかない人間であることには、それなりの利点がある。だがこのときの私には、何をすべきかがはっきりわかっていた。

Gilletteという名はアメリカのものではない。もとはフランスの名だ—発音はやわらかく、言葉をかすめるようで、決して喉の奥では響かない。18世紀の終わりにフランスからアメリカへ渡り、親類の助けを得て、その後のすべてを築いた、ただの一家族である。

だとすれば、Gillettenarrativeの譲渡で得た金で、私は何をしたらろうか—祖父Gilletteの家に、フランスのあの一片を持ち帰る以外に。本来は祖父のものでありながら、失ってしまったのかもしれない、あるいは一度も知らずに終わったのかもしれない、あの一片を。

BIC Franceを買収するために、OPAを仕掛けていただろう。

フランス政府は歴史的に保護主義だ、という知識を支えにして—もっとも、P&Gが同じことをやるのは決して許さなかったはずだ。世界市場に独占が生まれるおそれがあるのだから。

刃とカミソリの生産は打ち切っていただろう。消費者はおのずと、カミソリが売られている馴染みの場所へ戻っていったはずだ。母なるGilletteは、すぐにその恩恵を目にしただろう。そして私は、祖父に栄光の取り分を返していただろう—いま祖父がどこにいるにせよ。

ペンと残りの製品ラインについては、出版の世界に結びついた会社を築いていただろう—筆記具をつくって売るだけでなく、Amazonに何の関心もない地上のすべての書き手とつながる出版の仕組みの中に、それを組み込んだ会社を。

そのうえで、開かれた市場で力を競っていただろう。関わる全員の力量で。そして世界は目にしただろう。本物の企業文化を持つ者に何ができるのかを—誰にも告げられなかった空白の中に、たまたま居場所を見つける運に恵まれただけの者たちと比べて。

フレーガ。こんな人間がいるとは誰も思わない。それでも、実在する。

ナンド

追伸

なぜカミソリと刃の販売をやめるのか—付加価値は低くとも、BICが桁外れの販売数量を握っていると知りながら。

理由はひとつしかない。祖父Gilletteだ。それだけである。

フェルディナンド